

藤田東湖略年表

元号		西暦	年齢	できごと	水戸藩主
文化	3	1806	1	3月16日、水戸城下上梅香に生まれる。父は次郎左衛門一正（号・幽谷）、母は梅、幼名は武二郎、諱は彪（たけき）、字は斌卿（ひんけい）	7代治紀
	7	1810	5	3月、水戸城大広間で7代藩主治紀に謁見する	
	8	1811	6	堀河潜藏（文淵）から「孝経」の句読を習う	
	10	1813	8	8, 9歳のとき、幽谷から文天祥の「正気歌」を教示される	
	13	1816	11	閏8月、藩主治紀死去して、斉脩襲封し8代藩主となる	
文政	2	1819	14	4月、幽谷出府の時、伴われて豊田天功とともに江戸に赴き、亀田鵬齊・太田錦城に文事を問い、岡田十松に撃剣（撃ち合い稽古）を学ぶ	8代斉脩
	7	1824	19	5月28日、イギリス船員常陸大津浜に上陸(大津浜事件)。父・幽谷の命で死を決して異人を斬ろうと現場に向かったが、幕吏が船員を放還したため果たせず	
	9	1826	21	12月朔日、幽谷病没（53歳）	
	10	1827	22	1月26日、家督を継ぎ、200石を賜る。進物番となり、彰考館編修に補される。幽谷の私塾・青藍舎を継ぐ	
	11	1828	23	12月14日、斉脩にはじめて封事（意見書）を呈上する	
	12	1829	24	5月19日、彰考館総裁代役を命ぜられる 10月、藩主・斉脩の病が重かったが継嗣が定まらず、40余人の同志と共に無願出府し、斉脩の異母弟である敬三郎（斉昭）を立てることに奔走する 10月17日、斉昭襲封し9代藩主となる	
天保	元	1830	25	1月14日、無願出府を理由に同志と共に逼塞を命ぜられる 4月29日、八田郡の郡奉行に抜擢され、那珂郡八田村の陣屋に移る 10月19日、同僚川瀬教徳・会沢正志斎・吉成信貞とともに出府、斉昭に謁見する	
	2	1831	26	3月、目付山口頼母徳正の長女・里と結婚する（里は17歳） 10月29日、「回天必力」起稿	
	3	1832	27	2月、辞職を願うも許されず 4月14日、「壬申封事」を呈上する（*1832年は壬申の年）	

			5月29日、定江戸通事に転ずる 7月1日、東湖一家、小石川藩邸内の屋舎に移る		
6	1835	30	6月26日、御用調所（江戸勤務）に転ずる		
8	1837	32	1月29日、斉昭の甲冑謁見式（2月12日）のための式次第の草案を書く 6月、「弘道館記」の起草を命ぜられ、7月3日これを呈上する		
9	1838	33	8月、斉昭、幕府に提出するため「戊戌封事」を草する 12月25日、格式槍奉行に進み、足高50石を賜る（*足高：役職を務めた際に加給） 12月、領内検地のため土地方改正懸になる	9代斉昭	
10	1839	34	6月、再び命により水戸に至り、重ねて検地学校のことについて有司と協議する 7月2日、嗣子建次郎誕生 11月27日、先手物頭列となって彰考館編集に補せられる。学校造営御用懸を命ぜられる。この時、土地方改正懸を免ぜられる		
11	1840	35	1月11日、御用人永詰となり格式用人上座に進み、足高100石、役料100石を賜り、400石となる 1月、江戸に上がり、蝦夷地拝領請願に関して老中・水野忠邦と会談する 1月21日、再び土地方改正懸を命ぜられる 7月24日、藩内総検地始まる		
12	1841	36	8月1日、弘道館仮開館		
13	1842	37	5月4日、弘道館制度懸となる この年、大三郎、小四郎誕生 7月1日、偕楽園開かれる 11月24日、藩内総検地（天保検地）が終了する		
14	1843	38	1月15日、格式馬廻役頭上座となる		
弘化	元	1844	39	5月5日、斉昭に従い江戸に到着する 5月6日、斉昭、致仕謹慎を命ぜられ、慶篤が水戸藩10代藩主となる 5月6日、幕命で東湖も蟄居に処せられ、江戸小石川藩邸内の長屋の一室に幽閉される 5月11日、「東湖随筆」起稿 8月16日、「常陸帯」成稿 9月16日、禄を奪われ、上梅香の自宅を没収され、新たに15人扶持を給され、城下町横竹熊に蟄居屋敷を与えられる	

			<p>10月、斉昭の潔白を訴える雪冤運動が盛んになる</p> <p>11月26日、斉昭、謹慎を解除される（藩政関与は認められず）</p> <p>この年、「瓢兮歌（けんけいか）」作る</p>	
	2	1845	40	<p>2月21日、小石川藩邸から本所小梅（現・墨田区）にある藩の下屋敷に移され、幽閉される</p> <p>3月12日、水戸の家族は横竹熊の蟄居屋敷に移る</p> <p>11月、「和文天祥正気歌」起稿</p> <p>この年、「瓢齊記」「小梅水哉舎記」記す</p>
	3	1846	41	<p>1月4日、会沢正志斎ら9人、城下中町に禁錮される</p> <p>1月30日、「弘道館記述義」初稿成る</p> <p>12月29日、幕命で蟄居を免ぜられ、幕命で遠慮を申しつけられ、小普請組へ入り、城下横竹熊の蟄居屋敷へ移されることとなる</p>
	4	1847	42	<p>4月、疾患を悪化させ、7月には加えて脱肛小便閉塞の症状を起こす</p> <p>9月、「弘道館記述義」の再稿はぼ成る（その後も推敲を加え、完成は嘉永2年の前半期か）</p> <p>10月24日、致仕、謹慎を命ぜられる</p> <p>11月5日、「許々路廻阿登（こころのあと）」を執筆し、高橋多一郎に託す</p>
嘉永	2	1849	44	<p>1月、二女・考、三女・悌の双子誕生。悌は生後20日ほどで夭逝</p> <p>3月13日、幕府、斉昭の藩政に与ることを許す</p> <p>4月14日、正志斎ら9人の禁錮が解かれ、自宅謹慎となる</p> <p>夏、「書述懐三決死矣詩幅後」記す</p> <p>12月、幕府、諸大名に沿岸警備を厳重にすべきことを命ずる</p>
	4	1851	46	<p>春、「正気歌」を管政友（かんまさすけ）の懇請により書いて与える</p> <p>7月、手足麻痺半身の自由きかず</p> <p>11月15日、四女・功誕生</p>
	5	1852	47	<p>2月、藩主慶篤、「大日本史」紀伝173冊を幕府に、ついで朝廷に献ずる</p> <p>閏2月16日、遠慮を解かれ、自由の身となる。これより公式に東湖と称する</p>
	6	1853	48	<p>5月、半身麻痺の症を養うため、3週間休暇願を出し、磐城の湯岐温泉へ赴く</p>

10代慶篤

				<p>7月3日、齊昭、幕府の海防参与となる</p> <p>7月6日、出府を命ぜられる</p> <p>7月20日、沿岸防禦御用掛に命ぜられ、定江戸勤となり、300石を給される（以前の15人扶持は返納）</p> <p>出府以来、江川英龍、川路聖謨、古賀茶溪、羽倉簡堂、藤森弘庵、安井息軒、塩谷宕陰、芳野金陵らと出会い、多忙を極める</p> <p>11月、幕府、水戸藩に西洋式軍艦（旭日丸）建造を命ずる</p>
安政	元	1854	49	<p>1月24日、側用人兼任を命ぜられ、役料150石を給され、前に通じ450石</p> <p>3月18日、齊昭、海防参与辞任を申し出る</p> <p>6月6日、「書 稽古徴今書幅後」記す</p> <p>7月5日、齊昭、幕府の軍制参与となる</p>
	2	1855	50	<p>2月9日、格式馬廻組上座に進みこれまで通り側用人勤務を命ぜられ、役料200石となり、先の役料150石を返納、都合500石となる</p> <p>4月29日、五女・清（すが）誕生</p> <p>9月19日、学校奉行兼任となり、役料物成100石加増され、都合600石となる</p> <p>10月2日夜10時頃、安政江戸地震に遭い、小石川藩邸内において死去</p> <p>10月9日、葬儀が行われ、水戸城外常磐共有墓地の藤田家の墓所に埋葬される</p>

*大洗町幕末と明治の博物館第10回企画展の展示図録「ふじた たけき～徳川齊昭のブレーン藤田東湖の魅力に迫る～」からの複製です
（元は、鈴木瑛一著「人物叢書新装版 藤田東湖」・吉川弘文館）